



館内にひしめく鉱物や化石の標本。11113は地球の不思議が詰まっている

＝京都市上京区の益富地学会館

受け継がれる「好奇の目」

1面から続く

「石 昭和雲根志」(白川書院) という書物がある。昭和42年刊行の益富壽之助氏の著書だ。その自序でこう書いている。

「人間には共通的に美しいものに惹かれる性質があるように不思議なものに好奇の目を向ける性質がある」

この言葉に益富氏の石に対する姿勢が端的に表されている。本は日本国内で見つかるユニークな岩石や鉱

物を紹介する内容だが、単なる科学書ではない。その石を取り巻く由来や産地による見た目の比較などといった風土記的内容であり、自ら興味を引かれた美石・珍石を語っている。



「標本を作ると、先生は見た目を気にしておられませんでした。これはどう置いたらより良く見えるかといった具合です」と話すのは、中

学生時代から益富家に入出入りをしてきた益富地学会館の主任研究員、藤原卓さん(64)。自宅で漢方薬の調剤

薬局を営んでいた益富氏は、正倉院の石薬の調査などを行った経験もあったが、鉱物や石に関しては生涯アマチュアを貫いた。

温厚で人好き。標本をプレゼントするのも好きで、藤原さん同様に中学生時代

以来出入りしていた元中学校教諭の武村道雄さん(60)

もそんな益富氏に育てられた。現在もボランティアで会館運営を手伝い、館報の連載「満庵放浪記」は190回を数える。「いろいろ

教えてくれた上に標本をポン、とくれはって、それがまた励みになってね。次は自分で探した石について教えてもらおう。楽しかったなあ」と懐かしむ。

中学・高校生から大人まで、益富家は地学に「好奇の目を向ける」人たちのサロンと化したという。そこから巣立った人材は、現在も大学や博物館など研究の一線で活躍。また呉服店員や芸術大教授、会社員など多彩な「アマチュアの家」が会館を支える。

昨年9月、長野・岐阜県

舞台の

遺伝子

境の御嶽山が突然噴火した。研究員の石橋隆さん(37)はすぐに現地向かい、採取した火山灰を分析し、鉄の硫化鉱である黄鉄鉱が主成分の一つであることを突き止めた。

「だからどう、ということではありません。いろいろな研究機関が分析しているでしょう」と話す石橋さんは、益富氏を直接知らない。しかし氏が語った「好奇の目」を受け継いでいる。

4月25日から3日間、大阪・天満橋で開かれた国内最大級の石と地学に関するフェアの名は「石ふしぎ大発見展」。それは一人でも多くの人に「不思議なものに好奇の目を向けて」くださいという、益富氏からのメッセージだ。

写真 志儀駒貴
文 藤浦淳

